

ティリッヒの技術論

前川佳徳

はじめに

ティリッヒの技術論と言うと、奇異な感じを持たれるかもしれない。実際、彼の『著作集』(Gesammelte Werke)でも技術論としては、第九巻「文化の宗教的実体」(die Religiöse Substanz der Kultur)に技術(Technik)の章として2論文(15頁)が収録されているのみである。そして、この2論文とも、彼が1925年から1929年まで在職したドレスデン高等技術学校(Technische Hochschule)での創立記念に関係するものである。したがって、ティリッヒ自身は、さして技術には関心を持っていなかったのかもしれない。しかし、彼の神学の集大成である『組織神学』(Systematic Theology)第三巻の「生と霊」(life and the spirit)では、技術(Technology)が人間の文化的行為を論ずる対象のひとつとして取り上げられ、そこでの両義性(ambiguity)が鋭く言及されている。また、彼が科学に対してもかなりの知識を有していたことが、「生と霊」での彼の言及の中から読み取ることができる。

そこで本稿では、上記「文化の宗教的実体」の技術の章に収められている論文「技術のロゴスとミュトス」(Logos und Mythos der Technik)(1927年)と、『組織神学』第三巻の「生と霊」(1963年)での<技術>に関するティリッヒの言及を取り上げ、その考察を進める。これは、単にティリッヒの技術論をまとめ、紹介することが目的なのではなく、そこに科学技術時代の現代が抱える問に対する答えがあるのではないかと考えるからである。また、そのようなものをティリッヒが1900年代の初頭にすでに提示していたことをも認識したいと思う。

予備的事項について

ティリッヒの<技術>に関する言及を考察する前に、予備的事項として、<技術><科学><自然科学><科学技術>の各定義を確認しておきたい。

<技術>と<科学><自然科学>は明確に異なるものである。<科学(science, Wissenschaft)>は、体系的であり、経験的に実証可能な知識全体を指し、その中の<自然科

学 (natural sciences, Naturwissenschaft) > は、自然に属する諸対象を取り扱い、その法則性を明かにする学問と定義されている。一方、< 技術 (technique, Technik) > とは、科学を実地に応用して自然の事物を改変・加工し、人間生活に役立てるわざと定義されている。(1) ここで、混乱を引き起こすのが< 科学技術 > という用語である。英語では、science and technique ではなく、technology を< 科学技術 > に対応させている。すると、< technique > と< technology >、< 技術 > と< 科学技術 > は異なるのか、同義語なのかということが問題となってくる。

たとえば、三枝博音は 1946 年の論文の中で、< 科学技術 > という言葉を日本人は実に安易に使っているが、こんな鶴のような概念を使い慣れるということはよくないことだと指弾している。< 技術 > は何かをつくり出すことにその志向があり、目的が定まっている。また、同一の目的に到るのにいくつもの方法があることが、技術にとっての大きな特質である。< 科学 > では知ることその志向があり、妥当しているものを認定し、法則をたてる。そこでは、真であるか真でないかが特質となる。< 技術 > は科学的なものではあるが、決して< 科学 > ではないと述べる。(2) それでいて 1961 年の講演で、三枝博音は「科学技術と人間性」と題して講演をした。(3) このような経緯を見ると、1900 年代後半から、科学を応用した< 技術 > を< 科学技術 > というように表現することが、日本で定着してきたことが伺える。

同じく三枝博音は 1941 年の論集で、< technology (Technologie) > の用語に触れ、これは< technique (Technik) > の学、技術学というべきものであるが、その概念はまだ明確ではないとし、< 技術 > (その当時の) に対して、ドイツ人やフランス人には< technique > でよいが、英米人相手には< engineering (technology に近い) > を使用しなければならず、< technique > では手練や技巧の意味に取られると指摘している。(4)

ここで留意しておかねばならないのは、17 世紀の近代科学の発祥において、それまでの技術 (technique) はその近代科学の発展を支え、それによって確立してきた 19 世紀の科学は新しい技術 (technology) の発展を支え、そこから現代の科学技術 (science-based-technology) が出現してくる過程である。その過程の中で、< 技術 > の概念は変化してきている。最初に示した、科学を実地に応用して自然の事物を改変・加工し、人間生活に役立てるわざと定義されている< 技術 (technique, Technik) > は、正しくは現代の< 科学技術 (science-based-technology または technology) > のことを指していると言える。また、上述の< technique > と< technology > のように、国によって同じ言葉の捉え方が異なる場合もあることに留意しておかねばならない。しかし、現代ではドイツにおいても、< Technologie > が現代の< 科学技術 (science-based-technology または technology) > を指し、< Technik > は技巧や技能の意味に近くなると思われる。

ここで、ティリッヒの< 技術 > に対する表現を確認しておくと、本稿で取り上げる「技術の

「ロゴスとミュトス」(1927年)はドイツ語で書かれており、そこでは<Technik>が用いられている。これに対する英語の訳本では、それを<technology>とし、(5) 日本語の訳本では<科学技術>を当てている。(6) 一方、『組織神学』第三巻の「生と霊」(1963年)は英語で書かれ、ここではティリッヒは<technology>を用いている。これに対する日本語の訳本では<技術>が採用されている。(7) 上述の時代の考慮からいくと、1927年の<Technik>に対しては日本語訳として<技術>を当て、1963年の<technology>に対しては日本語訳を<科学技術>とする方が望ましいと思われるが、現実の訳本ではその関係が逆になっているのである。そこで本稿では混乱を避けるため、1927年の<Technik>と1963年の<technology>の両者共通に、日本語訳としては<技術>を(科学技術の意を含め)採用することにした。いずれにしても、<技術>と<(自然)科学>と<科学技術>の違いは、認識しておく必要がある。

技術のロゴスとミュトス

まず、「技術のロゴスとミュトス」(Logos und Mythos der Technik)(Tillich[1927a], pp.297-311 in GW.)を取り上げ、ティリッヒの<技術>に関する言及の考察を始める。

a. 背景

ティリッヒは、1925年にマールブルク大学神学部の員外教授から、ドレスデン高等技術学校(Technische Hochschule Dresden)に宗教学の正教授として招聘され、1929年にフランクフルト大学の哲学教授として赴任するまで、その職にあった。当時、ドイツにおいては大学に工学部はなく、学問としての<技術>はTechnische Hochschuleで学ぶことになっていた。(8) ドレスデン高等技術学校では、そのような<技術>を学ぶ学生たちの視野を広げる新しい試みとして人文科学部を新設し、そこにティリッヒを招聘した。そこでのティリッヒは、主として将来に国民学校の教師となる人たちに幅広い宗教学を教えていたのであるが、その環境において、他の神学者よりは<技術>に近いところにいたことになる。(9)

「技術のロゴスとミュトス」は1927年に、そのドレスデン高等技術学校の創立99周年記念講演として行われたもので、その後、雑誌『ロゴス』(Logos)第16巻(1927年, pp.356-365)に所載される。(10) 彼は引き続いて、翌年(1928年)のドレスデン博覧会開会と、ドレスデン高等技術学校創立100周年記念のための記事を要請されており、(11) そのことから創立99周年記念講演の「技術のロゴスとミュトス」が、その当時高い評価を受けたことが窺える。

b. 技術のロゴス(本質)

ティリッヒは、「技術的行為とは、目的に対してその手段を見出すことである。……したがって、適切な手段により何ごとかがうまくいく場合、そこには技術が存在する」(ibid., p.297)とまず述べる。この捉え方においては、技術(的行為)は幅広い概念となり、言語とならばわ

われわれ人間の生における基本的なものとなる。この広義の〈技術〉(Technik)を、ティリッヒは展開技術(entfaltende Technik)、実現技術(verwirklichende Technik)と変形技術(umgestaltende Technik)に別けた。

それに先だち、「自然も技術的にふるまう」(「 $\Sigma \cup \Leftarrow (\Sigma \Rightarrow \text{J} \cap \text{J})$ 」)とティリッヒは述べ、展開技術とはこれに近いものであり、人間の生を利用しないし、破壊もしないで、これを守り、展開させるものである(農業や医学などに関連するもの)とした。一方、実現技術は、人間の生に奉仕し、その可能性を実現させようとするものである(芸術などに関連するもの)とする。そして、三番目の変形技術について、これが一般的に言われる〈技術〉であり、その後の科学技術(Technologie)を生み出すものであると言う。

この変形技術は目的によってのみ規定された事物を創造し、他を展開するのではなく、かえって人間の生における種々の連関を破壊する。すなわち、この変形技術は技術的形成物(人工物)を自然の中に創造し、そのことによって自然は高められるが、逆に自然は〈技術の目的〉となってしまふ。そもそも〈技術の手段〉は自然法則に則ったものであり、この自然の道理を逸脱する(手段と目的を混同する)と、自然によって破壊をもって報復されることになる。ティリッヒは警告を行った。(ibid., p.299-300) これは、明快に示されているわけではないが、人工物製造は自然(法則)を手段としながら、その自然を目的対象とするところに、いずれその自然からの報復を受けるといふ、そのティリッヒの言及は現在の環境問題への示唆とも言えるものである。そこで、われわれがよく理解しておかねばならないことは、「自然は技術的にふるまう」ことであり、そのことに倣ってわれわれの技術を発展させているうちはよいが、そのことを逸脱したような〈技術〉をわれわれが扱い出すと、必ずその自然からの報復を受けらるうということである。(12)

ついでティリッヒは、変形技術による技術的形成物(人工物)の中で最高度に成功したものとして〈機械〉を挙げ、それについての言及を行う。機械は技術的形成物(人工物)であり、目的としての形態(Gestalt)でありながら、制限付きにせよ一つの独自の形態になっていることに注意を喚起する。また、機械は無際限な可能性の象徴でもあるとティリッヒは述べる。機械のこの〈無際限性〉と〈独自の形態性〉とが、われわれの社会に対し革命的な意味を持つと、ティリッヒは指摘するのである。(ibid., p.302)

以上を、〈技術の本質〉に対する分析として、さらに人間の生における種々の連関の中での〈技術の位置づけ〉へと、ティリッヒはその考察を進める。とくに、経済的活動との連関について、資本主義経済は〈技術〉に地球を支配する可能性を与えたと指弾する。

「資本主義経済は、機械の無際限の可能性をなんら内的必然性を持たない商品の生産に向けるよう強制する。すなわち、利潤追求のために需要を人工的に造り出し、かつその需

要をひどい形で満足させる。機械のうちに眠っているのは中立的な可能性である。経済がそれを悪しき実在へと呼びさます。機械の可能性を、良き実在へとめざめさせることもできたにもかかわらずである。機械は中立である。したがって、精神（Geist）と社会とを荒廃化したとして技術に向けられる非難のほとんどは正当ではない。技術は中立的である。それはただ手段を用意するのみである。このことは真実である。すなわち、技術の可能性のうちに誘惑の力が潜んでいる。誘惑というものは、可能性が浮かび上がってくるところにはどこにでも存在する。そして、われわれへの誘惑は技術的な可能性である。われわれが誘惑に陥っているのは、技術を悪用しているこの経済をわれわれが黙認していることである。」(ibid., p.304)

「技術の可能性のうちに誘惑の力が潜んでいる」ということは、手段である<技術>そのものが目的となってしまうことと言える。本来、技術的行為は、目的に対し手段を見出すことであり、手段そのものであり、目的が達成されれば、手段である<技術>の役目も終了したことになる。また、目的が正しく設定されていれば、手段である<技術>は暴走しないはずのものである。しかし、ある目的で造られた手段としての機械（あるいは技術）が、その目的を完了しても、それ以外での可能性を有していると、人は<手段である機械（あるいは技術）>のための<新たな目的（可能性）>を創造しようとする。そして、創造された目的のための手段（機械あるいは技術）がより大きな可能性（誘惑）を有していると、それはさらにつぎの新たな目的を創り出そうとし、その循環は加速度的に拡大していく。いわゆる、手段と目的が逆転しながら、<技術>が悪魔的な一人歩きをはじめることになるのである。このような技術の悪魔性は、第二次世界大戦を経験して、より強烈に認識されるようになり、現代においては遺伝子工学の発展などで、より切迫した問題となっている。(13) ティリッヒは 1900 年代の初頭に、すでにそのような危惧を提示し、その時点でその元凶は、<機械>や<技術>にあるのではなく、それらを悪用する<資本主義経済>、そしてそれを黙認する<われわれ>にあるのだと、警告を発したのである。

c . 技術のミュトス（聖書観）

<技術>の本質と、その人間の生における種々の連関の中での位置づけについての分析を行い、そこでの大いなるアポリアを示した後、ティリッヒは次いで、それを聖書観の中に位置づけることを技術のミュトスと題して行う。

創世記 1:28「地に満ちて地を従わせよ」は、今や<技術>により成就されている。そのような可能性を予感して、詩編 8:6,7 は「神に僅かに劣るものとして人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただかせ、御手によって造られたものをすべて治めるように、その足もとに置かれました」と語っている。ここから、ティリッヒは以下のように<技術>を捉える。

「われわれは、技術の可能性から絶えず新しいものを手にし、やがて技術のその過程はわれわれを越えて行って、われわれをどこへ連れて行くのかが判らない。それゆえに、多くの人はそのようなものの存在しなかった時代を振り返って恋しがり、機械（技術）の攻撃者となる。彼らは起ってしまったことを元にもどしたいのである。しかしこれは、われわれの取るべき道ではない。われわれは前進する。ロマン主義の幻想は追わない。技術はこの世界を改変し、改変された世界がわれわれの世界なのである。究極的な生の意味の中に、技術を建設しなければならない。技術は、一方では神的であり、創造的であり、解放するものであるが、他方では魔的であり、人間を奴隷化するものであり、破壊的であることことをわきまえてである。技術は、存在するものすべてがそうであるように両義的（zweideutig）なのである」（*ibid.*, p.305-306）

ここで、ティリッヒは聖書観を引き合いに出し、技術の悪魔性ゆえに＜技術＞を否定することを否定するのである。人間は神によってそう造られており、存在するものすべてが両義性（Zweideutigkeit, ambiguity）を有しているのであると述べる。（14）そして、その解決の方向として、ローマの信徒への手紙 8:19 以下を指し示す。それは、精神（Geist）と自然が和解する＜新しい存在＞の待望である。

結論を先取りして言うならば、彼の神学の集大成である『組織神学』第三巻の「生と霊」（1963年）で展開される＜技術＞に関する言及の中心的内容については、この1927年の小論文の中にすべて含まれている。そのことは、あの大部の『組織神学』第三巻の「生と霊」の骨子となる部分、＜生の両義性＞と＜霊の現臨＞は、35年前のこの論文ですでに固められていたということである。このことは、35年間の間にティリッヒの思想に進展がなかったということの意味するのではなく、第二次世界大戦という価値観を根底から覆す時代を含んだ35年を跨いでも、なおその時代の問いに答えうる、時代を先取りした展開をティリッヒがしていたということである。とくに＜技術＞の問題で言うならば、1900年代の初頭に、まだ＜科学技術＞という概念が定着しきっていなかった時代に、現代のわれわれが抱える＜科学技術＞の問いに適切な展望をみせてくれる分析をティリッヒは提示していたわけである。それは、予言者的とも言えるものであろう。

技術的行為（生産）における曖昧性（ambiguity）

ついで、『組織神学』（Systematic Theology）第三巻の「生と霊」（life and the spirit）（Tillich[1963a], pp.11-294）の中で、ティリッヒの＜技術＞に関する言及を取り上げ、考察を

進める。(15)

a . 背景

ティリッヒの『組織神学』は、彼の神学の総集であり、第三巻はその完結として1963年に出版された。その第四部「生と霊」(聖霊論)でティリッヒは、人間の生(life)と霊(spirit)の両義性(ambiguity, Tweideutigkeit)を問いとし、神の霊(Divine spirit)をその答えとして関連させ、霊的現臨(Spiritual Presence)による神律(Theonomy)への道を指し示し、第五部の「神の国」(Kingdom of God)と「永遠の生命」(Eternal Life)へと展開する。

その最初の、生の過程における曖昧性(ambiguity, Tweideutigkeit)の論議で、ティリッヒは人間の文化的行為としての<技術的行為>を取り上げ、その両義性(ambiguity, Tweideutigkeit)を鋭く言及した。本稿では、その指摘と、そこからの克服の方向性についての部分を考察の対象とする。

さて、ここで展開される<技術>に関する言及の中心的内容については、先の1927年の小論文「技術のロゴスとミュトス」の中にすべて含まれていると述べたが、この「生と霊」では<技術の本質>の分析がより明快に展開され、さらには<技術の本質>を支配する<人間存在の本質>の分析が詳細に行われ、それを通しての<技術の本質>が論議されている。芦名定道が本誌「ティリッヒと科学論」で指摘するように、ティリッヒにおいては、1920年代における<学的認識を典型とする認識行為>の分析から、1950年代以降は<人間存在の存在構造>の分析へと、その問題設定が移行している。(16)

b . 生の過程における曖昧性とその探求

すべての生の過程において、本質的要素と実存的要素、創造された善とそれからの疎外とは、互いに合体していて、そのいずれか一方が排他的に働いているということはない。生は常に本質的要素と実存的要素とを含んでいる。これが曖昧性(ambiguity)の根源であると、ティリッヒは言う。ティリッヒはその人間理解において、人間は本質的存在と実存的疎外との両面を有することを強調する。それゆえに、人間が何らかの行為を行う時、またある対象に対して何らかの関係を持つとするとする時、曖昧性あるいは両義性ということが必然的に起こると述べる。生の曖昧性は、生のあらゆる次元、あらゆる過程、あらゆる領域に表れており、そして曖昧ならざる生の問題はいたるところに潜在していると、ティリッヒは言うのである。(ibid., p.107)そして、ティリッヒにおける<曖昧ならざる生の探求>は、生のそれぞれの機能をその実存的歪曲から分離された、その本質においてではなく、それが現実の曖昧さの中で現れる姿において、検討することである。(ibid., p.32) いわゆる、体系化の中に本質を認識する方向性ではなく、存在構造の分析の中に本質を見出していく方向を採用するのである。

c . 技術的行為(生産)における曖昧性の分析

ティリッヒは、文化の基礎的機能について、文化はあることに気を配り、それを活かし、成

長させるものである。かくして人間は、彼が遭遇するすべてのものを育成することができるが、そうすることによって、彼は育成される対象をそのままにしては置かない。彼はそれから何か新しいものを創造するのであると述べる。(*ibid.*, p.57) その中で、道具の生産を例に取り上げ、そのことを通して技術的行為が必然的に有する両義性について言及している。

「道具の生産の解放的能力は、有機的過程そのものの中には含蓄されていない諸目的を実現する可能性にある。すなわち、有機的過程の内的諸目的 (tele) は過程そのものによって決定されているが、技術的生産の外的諸目的は決定されていないので、無限の可能性を提示している。宇宙旅行ということは技術的目的であり、とにかく一つの技術的可能性であるが、それはひとつの生物の有機的必要性によって決定されてはいない。それは自由であり、選択の問題である。しかしながら、それはひとつの緊張をもたらし、そこからわれわれの今日の文化の紛糾が起こってくるのである。それはすなわち、技術的可能性が無限であるということによって引き起こされる手段と目的との転倒である。手段が可能であると言うただそれだけの理由で、手段が目的となるのである。しかし、もしそれが可能性であるというだけで、可能性が目的となるならば、目的の本来の意味は失われているのである。このような歪曲は文化全体に影響し、そこでは手段の生産が目的となり、それを越えたなんらの目的も存在しないということになる。この問題は技術的文化に本有的なものであるが、そのことは技術の重要性を否定するものではない。だがその両義性を示しているのである。」(*ibid.*, p.61,62)

手段と目的とが逆転すれば、技術は悪魔的な一人歩きを始めると言うことは、先にも触れた。可能性があるというだけで、可能性が目的となる有り様は、外部から見ると以上にと技術の分野では何の疑いもなく日々行われており、技術の専門化といわれる人達の間では、そのことの認識が外部から予想する以上に欠落している。ティリッヒが、手段と目的の転倒を技術的文化に本有的なものと指摘するのはまさしくその通りであるが、そのことへの認識の現状でのあまりの不足が、科学技術の進展の将来を不安なものたさせているのである。

この道具に対する考察から進んで、技術生産そのものの両義性について、ティリッヒは三つの指摘を行った。第一は技術的生産における「自由と限界の両義性」、第二は「手段と目的の両義性」、第三は「自己と物との両義性」である。そして、神話の時代からわれわれの時代まで、これらの両義性が概ね人類の運命を決定してきたと述べる。(*ibid.*, p.73)

まず第一の「技術的生産における自由と限界の両義性」について、それは神話や伝説の中に表現される、たとえばアダムが神の意志に反して知恵の木の実を食べたと言う聖書の物語、あるいはバベルの塔の物語などの基底に存在するものであると述べる。その結果は、創造的であ

ると同時に破壊的である。そして、このことは、すべての時代における技術的生産の運命であると、ティリッヒは指摘する。それは限界の見えないような道を開くが、それを開くのは有限な存在の人間だからである。

第二の両義性、すなわち「手段と目的」のそれは、技術的生産の根本的な両義性に関係しているとする。それは「何のために？」と問うことによって、技術的自由が限界づけられているからである。この問いが人間の肉体的存在の基本的要求によって答えられている限り、問題は隠されているが、基本的要求が満たされた後に、新しい要求がはてしなく生まれ、満たされ、さらに満たされんがために生み出されるということになる。問題が表面化してくると、ティリッヒは指摘する。なぜなら、このような状況においては、技術的可能性が社会的、個人的な誘惑となる。それより優れた目的が見つからないからである。そして、ティリッヒは、この曖昧性がおおよそ今日の生活が空虚になっている理由であり、同時にこの状況を単に「生産を続けるな」というだけでは変えることは出来ない、と述べるのである。

このことは、第三の「自己と物との両義性」についても妥当する、とティリッヒは言う。技術の産物は、自然的対象とは対照的に、ひとつの「物」であり、自然の中には「物」はない。技術的行為によって自然的対象を物に変化させるのは人間の自由である。すなわち、木を材木に、馬を馬力に、人間を一定量の労働力に変化させるのは、人間の自由である。しかし、対象を物に変化させる事によって、人間は自然的構造と関係を破壊し、しかも人間がそのことをするとき、人間にも何事が起こる。「人間は単なる物を生産し支配することによって、自分自身も一つの物となる。実在が技術的行為によって実在をひとかたまりの物に変えられれば変えられるほど、変化せしめる主体そのものも変化する。技術的可能性によって人間に与えられた自由は、技術的現実の奴隷に変わる。これは生の自己創造に本来的な両義性である。」とティリッヒは指摘するのである。

またそれは、ロマンティックな、技術以前のものによって克服されたり、いわゆる自然的なものに回帰することで解決されたりはしないと、ティリッヒは述べる。「人間にとっては、技術的なものは自然的な何物かであり、自然的な原始性への隷属は不自然なものとなろう。」と彼は指摘するのである。この点は、リン・ホワイトが指摘する、自然および自然と人間との関係についてのもう1つ別のキリスト教の見解を提示した、アッシジのフランチェスコの試みを、ホワイトが失敗に終わったと結論したことと関連して、重要な点と考える。

曖昧性 (ambiguity) の克服と霊的現臨におけるアガペー

技術的生産の三つの両義性は、技術的生産をなくすことによって克服され得ない。それらは、それら以外の両義性と結びついて、手段と目的との曖昧ならざる関係の探究、すなわち、

神の国の探究へとわれわれを導く、とティリッヒは言う。まず、三つの両義性に結び付いたものを、主体と客体との基本的両義性として、ティリッヒは以下のように指し示す。

「主体と客体との基本的両義性は、人間の技術的活動との関係においては、技術的進歩の無限の可能性と、人間が自分自身の生産性の結果に対して自己を適応させることにおける彼の有限性の限界とに起因する葛藤の中に表現されている。主体と客体との両義性はまた目的に対する手段の生産にも表現されている。そこでは、目的そのものが、究極的目的なき手段と化している。この両義性はまた、技術が自然のある部分を物へと受容せしめることにも現れている。ここでは物は単なる物、すなわち、技術の対象に過ぎない。」

ここで、神律はこれらの両義性に対して何を意味し得るのか、すなわち、いかにすれば主体と客体との分裂を克服しうるのか、との問いに対して、「それは、主体的資質を浸透させようような対象を生産することによって、あるいは、すべての手段を究極的目的へと決定づけることによって、またそうすることによって、すべての所与を超えうる人間の無限の自由を制限することによって、ということになる。」とティリッヒは答える。

そして、靈的現臨の衝迫の下では、技術的過程といえども、神律的となり得るし、技術的活動の主体と客体との間の分裂は克服され得ると述べるのである。

ティリッヒは、「靈的現臨は、信仰と愛によって、人間を曖昧ならざる生の超越的統一へと高めながら、本質と実存とのギャップを越えて、したがって、生の曖昧性を越えて、新しき存在を創造する。」と述べる。愛 = アガペーは、靈的現臨の脱自的顕現である。しかるに、それは信仰に結び付いてのみ可能であり、それは曖昧ならざる生の超越的統一へと引きこまれた存在の状態である。この理由によって、アガペーは愛の他の資質とは独立しているが、しかしそれらと結び付き、それらを審判し、それらを変革することができるのである。「アガペーとしての愛は、他のあらゆる種類の曖昧性を克服する靈的現臨の創造するものである。」

このアガペーの資質について、ティリッヒは三つのものを挙げる。第一の資質は、明らかに制限をつけずに、愛の対象を受け容れることにある。第二の資質は、その対象の疎外され、世俗化され、魔神化された状態にもかかわらず、その受容をしっかりと持続しているところに現れている。第三の資質は、愛の対象を受け容れることによって、彼の神聖性、偉大性、尊厳性が回復されることを待望している点に見受けられる。以上を示し、アガペーは、その対象を曖昧ならざる生の超越的統一へと導入すると述べるのである。

愛の特徴は、聞き (listening) 与え (giving) 許す (forgiving) ことである。まず聞くことにおいて、相分れているものが再結合される。それが愛のわざである。そして、人格が互いに出会い、語りかけ、応答し、約束をなし、その成就に向かって責任をもって生き、人類全体

の福祉のために、多くの人格的存在が、献身的に生きる時、歴史が存在する。これこそが、神律への道となると、ティリッヒは語るのである。

む す び

森本武著『負のデザイン』で、「デザインとは、問題に対する解決案構築の全行程である。…（しかし）市場という一元的な価値の場における問題解決の道具に落ちぶれてしまった。要するに、売れるためのデザインでしかなくなってしまった。…デザインは、人間の幸福に貢献する問題解決の技術のひとつなのである」と指摘されている。さらに、「愛という抽象概念がある。これを扱うのは哲学者や宗教者で、デザイナーではないと思い込んでいるデザイナーが多いことと、デザインの空虚さは関係深い。愛を考え、知ることは、万人に共通の人生最大最重要の仕事なのである」とも述べられている。

負のデザインとは、何かを作り出して事態を改善するより、何かを取り払う事で解決することを志向する。公園が造られると、噴水やベンチ、遊具が備えられる。しかし、メンテナンスのことが考えられていないから、やがてそれらが公園を荒らす原因になる。何も無い空間の方がよかったのである。震災で建物が崩壊すると、それよりも強固な建物を造り直す。むしろ、自然には勝てない、大きな地震で建物は壊れるものだという前提で、建物および都市を設計する。そういう志向も必要なのではないか。それが、負のデザインの発想である。

現在の技術・科学が引き起こす問題に対して、それを学的認識として分析し、倫理規定を設けて規制していく方法には、ある種の限界があるのではないだろうか。ティリッヒはその解決法として、組織神学の聖霊論では、人間存在の本質、本来的に有する両義性 <ambiguity> を認識し、その克服の道としてのアガペーに相関させて、神律への探求の方向性を指し示した。同様な方向への指向が、技術（設計）者からも出てきていることに、ティリッヒの指し示す方向性の可能性を信じたい。